

高齢者施設に入居する結核患者の支援 ～施設職員とのカンファレンスを通して～

○黒岩由衣¹⁾、戸高由佳里²⁾、蓑毛真寿美³⁾、和田陽市¹⁾
都城保健所¹⁾、中央保健所²⁾、元都城保健所³⁾

1 はじめに

現在、日本における結核疫学像の第一の特徴は、結核患者の高齢化と言われている¹⁾。平成 28 年の新登録結核患者のうち 65 歳以上の患者の割合は全国 66.6%、本県 81.1%、都城保健所管内 82.1%であり、本県及び管内では年々増加傾向にある。さらに、管内の平成 29 年の新登録結核患者のうち 80 歳以上の患者が半数以上を占めている。

また、結核病床での入院により身体及び認知機能が低下し、退院先が自宅ではなく高齢者施設等となる患者もいる。このように高齢化する中で施設に入居する患者が内服を継続するためには主な支援者となる施設職員の協力が重要である。しかし、業務に携わる中で、施設職員等の結核への理解が十分でないと感じることが多かった。

今回、退院後高齢者施設に入居した患者への支援を通して、高齢者施設における支援者が結核及び支援方法を理解することの重要性と保健師の関わりについて示唆を得たので報告する。

2 活動内容

- (1) 患者及び患者の支援者の状況について情報収集を行った。
- (2) 患者及び患者の入居施設の職員とカンファレンスを実施した。
- (3) 施設職員と連携しながら地域 DOTS を実施した。

3 結果

(1) 事例概要、経過 (表 1)

A 氏、80 代後半、女性、結核既往なし、診断:肺結核・粟粒結核、病型:bIII3bp1、要支援 2、独居

表 1 A 氏の経過

時期	診断前		入院中 (4 か月間)		退院後 (カンファレンス前)
経過	自立して生活していたが、断続的な発熱が出現し、高熱、転倒により ADL 低下		・薬剤の副作用出現し、薬剤の中断、変更あり ・廃用症候群を合併し、歩行困難となる	歩行困難だが、車いす生活できる程まで回復	かかりつけ医療機関へ定期通院しながら治療を継続
生活場所	自宅	B 施設	結核専門病院(3 か月間)	かかりつけ医療機関 (1 か月間)	B 施設
支援者		施設職員	専門病院職員	かかりつけ医療機関職員	施設職員
	家族				
支援者の状況			専門の医師、看護師等の支援体制	医師、看護師常勤の支援体制	結核患者支援の経験がなく結核への理解は不十分
本人の状況訴え	趣味は料理で、好んで家事をしていた		・拒薬はなく職員の指示通り治療を行うが、治療意欲が低い ・結核治療が他疾患の治療と同等と考えており、		・施設職員が助けてくれるから安心 ・家族が 1～2 週間毎に来てくれるから助かる ・施設職員から渡された薬を飲んでいる
保健所の関わり			院内面接 (月 1～2 回) 家族面接 看護者からの情報把握		カンファレンスの実施 服薬支援の状況把握 患者面接

(2) カンファレンスの実施

医療機関退院 1 か月後に A 氏の入居施設 (以下、B 施設とする) にて、カンファレンス

を実施した。カンファレンスでは、パンフレットを用いて結核の説明及びA氏の経過について情報共有を図り、服薬支援方法と役割について検討を行った。(表2)。

表2 カンファレンスについて

参加者	A氏、A氏担当の介護士、A氏担当の看護師(2名) ※職員は結核患者支援の経験なし
B施設の背景	<ul style="list-style-type: none"> ・これまで結核患者の受入はあり、今回、抵抗なくA氏を受入れた ・入居者毎に担当が分かれているため結核患者を支援したことのない職員もいる
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・結核について説明(病態、治療、副作用、薬剤耐性菌、症状) ・A氏について情報共有(結核専門病院入院中の様子、施設での様子、受診及び治療状況、治療終了予定時期) ・A氏の支援者と支援状況の確認(担当看護師、介護士、家族) ・DOTSについて説明(目的及び内容、服薬方法、服薬支援ノートの使い方) ・服薬方法の検討(それぞれの役割の明確化、服薬支援ノートの管理)
実施前後の参加者の変化	<ul style="list-style-type: none"> 〈結核理解について〉 ・結核について理解が深まりA氏からの感染は心配ないと安心できた ・薬剤耐性結核菌についての説明を受け、内服の重要性を理解できた 〈DOTS支援について〉 ・今までは服薬支援ノートの重要性を理解しておらず、ノートに記載の漏れがあったが、服薬確認のツールとしての重要性を理解できた ・現在の支援方法で良いか不安があったが、服薬支援の役割と方法を確立できた ・保健所が結核患者の管理を行う目的が分かった。B施設職員と保健師間で検査結果等の情報共有を行う目的が分かった ・薬の管理だけでなく、副作用の確認等も含めた全身状態の管理の重要性を理解できた

(3) 施設におけるDOTS

A氏はB施設職員の協力のもと、検討した支援方法に基づいて確実に内服を継続できている。B施設職員は、服薬支援ノートを活用しながら内服と副作用の観察を行っており、担当看護師の不在時も他職員が確実に支援を行っている。

4 考察

今回のカンファレンスは、B施設職員にとって結核に対する疑問を解決できる場となり結核患者への理解を深める機会となった。また、服薬支援方法を検討したことでA氏がより確実に内服を継続できる体制が整った。

B施設職員はこれまで保健所、A氏、B施設職員のそれぞれの関係や連携の目的を十分に理解できておらず、保健師からB施設への連絡は一方的になりがちであった。しかし、現在はB施設職員の十分な協力のもと施設におけるDOTSが実施でき、A氏は内服を継続している。カンファレンスによりB施設職員がそれぞれの関わり及び服薬の目的を理解し、保健師とそれらを共有できたことは、その後の円滑な地域DOTSにつながったと考える。

今回のカンファレンス実施時期は入居1か月後であったため、その間、A氏がB施設職員から必要な支援を受けられなかったことも考えられる。退院前にカンファレンスを実施することで、切れ目ないよりよい支援体制を整えることができたのではないかと考える。

5 おわりに

結核患者支援経験の少ない支援者のもとで患者が治療を完遂するためには、保健所と支援者が情報共有を行い、支援者の結核への理解と協力を得ながら支援を行っていくことが重要である。今後も施設職員との情報共有の場を設け、担当職員のみならず施設全体の結核患者への理解が得られるよう働きかける必要がある。

参考文献

- 1) 公益財団法人結核予防会：結核の統計 2017、2017
- 2) 中川環他：大阪市の結核治療成功要因の分析によるDOTS事業の評価、結核、82巻10号、765-769、2007